

「崩れる人工授精の匿名性」を視聴して

先に当HPで外国の生殖ビジネスの現状（「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（IV）、2007.09.10.「生殖ビジネスの時代に、どう向き合えばいいのでしょうか」：参照）について触れたが、その関連番組「お父さんに会いたい～アメリカ・崩れる人工授精の匿名性～」を視聴した。

人工授精で生まれた子どもが100万人を突破したアメリカでは、精子提供者ドナーのプライバシーを守る匿名性が原則とされたが、親や兄弟、姉妹を知りたいという子どもの強い思いと、自分の精子から生まれた子どもに責任を果たしたいという父親の願いが、この原則を崩しつつあるよう。

その仲介をしているのはあるインターネット・サイトで、掲示板にドナー番号や個人情報を投稿して互いの存在を知り、実際に父子の対面を果たすケースも少なくないようで、父親と子が絆を築こうと継続的な交流を続けるケースも取材されていた。

投稿してくる子どもは、青年期の子どもが多いとか。

更に、ドナーの匿名性が崩れることで何が起こるのか、さまざまな家族の交流を取材しながら人工授精をめぐる新たな動きもレポートされていた。

例えば、かつてドナー提供者であった男性と結婚し家庭を築いている女性が、家族以外に夫の遺伝子を持つ子どもの存在を夫から告白されての戸惑い等。

ドナーである「父親を知りたい」と願う子どもは、幼少時期に養子縁組させられた子どもたちが成人して「自分の人生が一つの物語とすれば、冒頭の1ページが白紙のままで取り残されているようなもの。ルーツ探しは、そのページを埋める作業であり、人としてごく自然な気持ち（「雑学BN」の書籍等読後感関係（IV）、2007.10.16.「書籍『赤ちゃんの値段』を読んで」：参照）」と共通するのだからなあと推測する。

やはり思うに、人工授精で生まれた子ども、また、養子縁組で育った子どもであろうが、感情ある一人の人間。

自らのアイデンティティーの出発点を確認したいと青年期に思うようになるのは、人の成長過程として当然の気持ちであろう。

また、単にその時の「人工授精で生む」という事象だけでは片づけられない、後々も自らも含め周りの人々の気持ちを引き込む事象であることを考慮し、それら気持ちにどう向き合うかの責任の覚悟ある精子提供や人工受胎の選択であって欲しいと、番組を試聴して思った。